



KEIWA

COLLEGE REPORT

敬和学園大学と地域社会をつなぐコミュニケーション誌
敬和カレッジ・レポート

第74号 April 2013

発行/敬和学園大学後援会 敬和学園大学広報委員会



Close up

「新しい歩みに向けて」 学長 鈴木 佳秀

卒業式・記念パーティーのご報告/卒業生からのメッセージ
卒業論文のご紹介/公務員・教諭に採用されました

学内合同企業説明会/被災地ボランティア・被災者訪問
中村先生が高校生新聞にコラムを連載



学生による学生紹介 フリーペーパー制作順調！

敬和学園大学では、大学案内パンフレットとは別に「KEIWA CREW」というサブパンフレットを発行しています。このサブパンフレット、学生情報発信チーム「KEIWA CREW」のメンバーが、学生たちの目線で気になる学生を独自に取材し、紹介するものとなっています。

「新潟美少女図鑑」を発行するテクスファームさんからプロのご指導をいただきながら、取材・編集作業もいよいよ大詰めを迎えています。

「KEIWA CREW」第2号の発行をお楽しみに!

もくじ CONTENTS

Close up	1
「新しい歩みに向けて」 学長 鈴木佳秀	
社会を照らす希望の光 第19回卒業式のご報告 …	4
卒業生からのメッセージ	6
英語文化コミュニケーション学科卒業 後藤はるか	
国際文化学科卒業 太田文哉	
共生社会学科卒業 長谷川啓太	
退職する教員からのメッセージ.....	7
人文学部 パトリック・リー	
4年間の集大成 卒業論文のご紹介	7
新発田市職員に採用されました	8
新潟県教諭に採用されました	9
中村先生が高校生新聞に連載「デニス・ザ・メニス」 …	10
同窓会リレー・エッセイ ^②	12
「与えられたチャンス」 金田彩夏 (17期生)	
キャンパス日誌 (1月～3月)	13

〈表紙写真〉
卒業式での菅家茜さんによる答辞 (p.4)

新しい歩みに向けて

二〇〇九年四月、学長に就任して以来、さまざまな課題に取り組んできましたが、あつという間の四年間でした。皆さまから寄せられたご好意に感謝しつつ、新しい歩みを始めるため、これまでの歩みを振り返るの必要があります。

●新発田での出会いと大震災

就任した一年目は、敬和学園大学を知るための一年でした。教職員の名前と顔を覚えることから始め、各種委員会の構成や、委員会が負っている課題や職責、大学の諸行事や約束事を学ぶことに集中しました。理事会や評議会なども前任校（新潟大学）と異なった仕組みで、私立大学の厳しさを教えられたように記憶しています。

二年目は、大学を応援してくださいという地元政財界の方々のお付き合いを拡大する一年でした。オレンジ会の会長であられた新発田建設（株）の故渡邊幸二郎会長のお招きで新発田ロータリークラブに入会し、交際範囲が格段に広がったのです。敬和学園大学が地元の方々に愛されていることを実感できたのは、何よりの経験でした。

卒業式や入学式での式辞、チャペルでの説教、高等学校との合同研修会、新発田朝市十二齋市、まちカフエりんくとの関わり、オープン・カレッジ等の行事をこなすうち、次第に大学

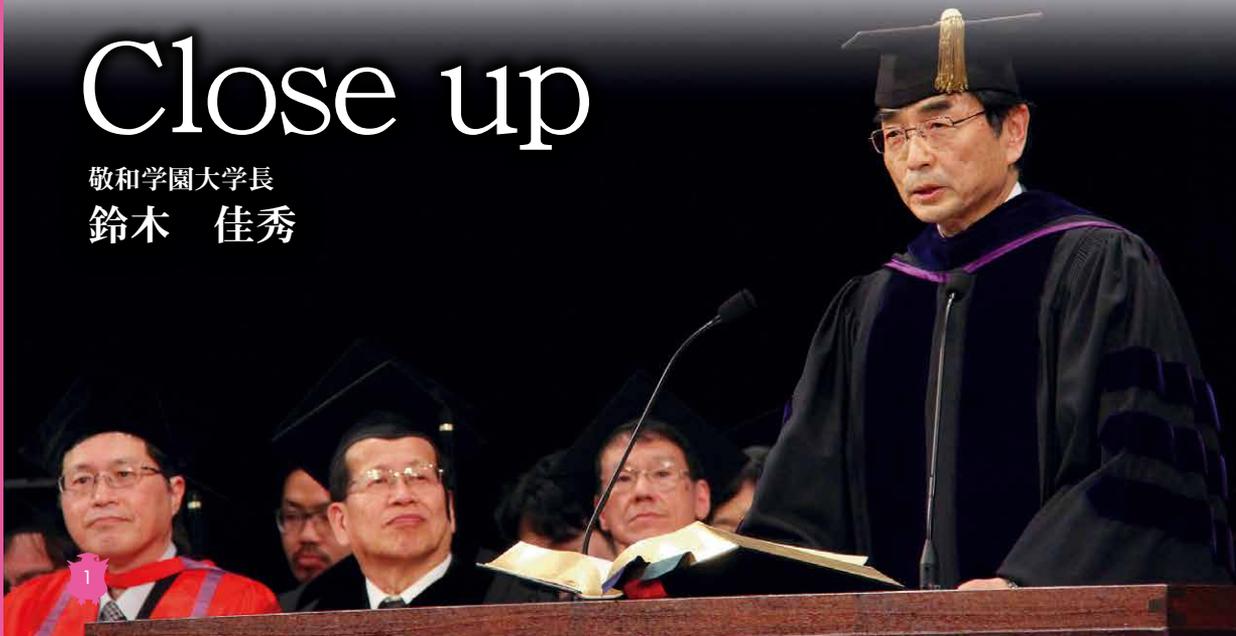
の空気に慣れ、身構えないで仕事ができるようになったのは教職員や学生諸君の協力があつたからです。大学に対する期待と愛情が深められた一年でした。

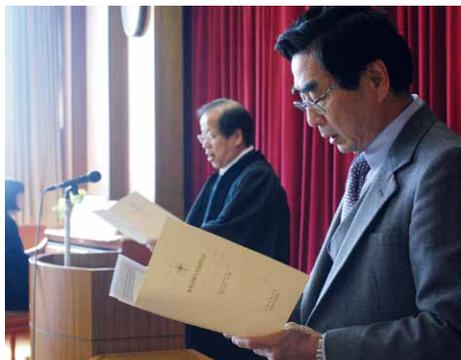
この二年目に創立二〇周年記念行事が予定されていきました。記念式典を感謝の気持ちで迎え、責任を果たすことができました。式典に出席してくれた元同僚で、新潟市内の大学学長や理事、副学長になつている友人たちから、敬和学園大学オレンジ会の存在について賞賛と驚きの声を聞かされたことをよく記憶しています。その折りに、大学にチャペルを建てさせていたきたいという幻を口にしました。機会があれば訴えたいと考えていたことでした。三年目から建設に向けたプロジェクトを立ち上げようと思っていたのです。

年が明け、二〇一一年三月一日に発生した東日本大震災で、状況が一変してしまいました。被災地や被災された方々の支援を第一に考え、チャペル建設プロジェクトの立ち上げを一時凍結させる決断をしました。

Close up

敬和学園大学長
鈴木 佳秀





学長就任式にて（2009年4月1日）

顧みますと、三月一日当日の午前中、故渡邊幸二郎会長の社葬が行われていたのです。渡邊明紀社長からのご依頼で弔辞を読むことになり、悲しみに満たされながら弔辞を読んだことを思い出します。まっすぐな方で、筋を通し、信仰をもって生きてこられた方なので、敬愛の情も深かったのです。分を越えると思いつながら弔辞を読ませていただきました。社葬が行なわれた新潟グランドホテルから自宅に戻りましたが、親しい方を天にお送りした喪失感からか、抜け殻になってしまったかのように、長い間じっと台所の椅子に座っていたのです。突然ゆっくりとビル全体が揺れ始めました。尋常でない長い揺れに驚き、すぐにテレビをつけました。東北地方の太平洋岸一帯に大津波警報が発令されていました。中継を食い入るように見つめていましたが、

想像を絶する津波の来襲を目にし、言葉を失っていました。夕食に何を食べたのか、食べなかつたのか、周りのことが目に入らず、略礼服のままテレビに釘付けになっていたのです。それに気付かないほどでした。午後から夜の記憶が抜け落ちるくらい衝撃を受けていたことを思い出します。多くの方々を尊い生命が奪われたこの出来事が、学長就任以来、最も重大な出来事となってしまいました。

●震災復興への取り組みと大学改革

大震災の直後、学内にKeiwaHOPEが組織され、自主的に救援活動にのり出した若者たちの姿を見て、涙が出たことを覚えています。建学の精神が、生きて受け継がれていると実感しました。第一のものを第一にという姿勢で対応するように心がけましたが、この年に県からの助成を受け、大学は博報堂による「健康診断」を受けました。学内外におけるさまざまな活動、教育・学生指導の現状から対外的広報活動等で、改善を勧めるアドバイスをいただきました。大学をもっとよくしたいという心意気で、教職員が一丸となり抜本的な改革を進めることになりました。大学のホームページが刷新されたのもその効果の一つです。個人的には、現在実施されている学科別の入学試験の方式を、人文学部一括の入学試験に変えることを示唆されました。入学者が自由に進むべき学科を選択できるようにすれば、学生諸君のニーズに応え



創立20周年記念式典にて（2010年10月30日）

られると考えるようになったのです。これは今後の課題です。

この三年目に、学長就任以来、精神的に支えてくださり助けてくださった宇田川潔事務局長が勇退の表明をなさいました。これも衝撃でした。またこの年度の終わりには、後宮俊夫先生が理事長を退任され、新たに大宮薄先生が就任されました。わたくし自身の意識改革が求められたことは、言うまでもありません。

こうして四年目を迎えました。東日本大震災で被災された方々への支援活動は継続して行われています。学生たちの活動が、一段と輝きを増してきているように感じます。教育研究活動に追われている教員にも、また責任ある職務を課せられている職員のためにも、大学はどうあるべきなのかを考えさせられた一年でした。その中で、アーチェリー部の星亜沙

美さんが、インカレで二連覇を達成したことは快挙でした。新発田市が独自に垂れ幕を市庁舎に掲げ、祝ってくださいたことは感激でした。彼女の後に続く学生が出てくることを信じています。スポーツで地域の活性化に貢献できることを教えられたように思います。またこの年、加藤順事務局長が就任されたことは、新たな第一歩となる出来事でした。

●学長として二期目の思い

任期が終わる年度末に、皆さまから続投の信任をいただきました。次の四年間にどのようなドラマが待ち受けているのかは分かりませんが、就任した年の入学式で、学生諸君に語った「行き先を知らずに出て行ったアブラハム」にふと思いを馳せる心境になり、虚心に前に進む決断をしました。多くの方々が大学を覚え祈ってくださいています。主なる神がこの大学をお見捨てになることはない、その確信をもって主の御用に当たりたいと思います。

取り組みたいと願っている構想は幾つがあります。その第一は、創立二五周年記念行事に大学チャペルを建てさせていだきたいということです。祈りをもってプロジェクトを立ち上げたいと思います。第二に、佐々木駅を最寄りの駅にしてくださいましたが、新発田市との関係をより密度の高いものにするため、学バスを新発田駅と大学間へとシフトし、学生たちが気軽に新発田市内に出入りできるように

にしたいと考えています。それがまちの活性化に繋がると思っています。それと関連するのが第三で、新発田商工会議所のビルを新発田駅前に移転させることが審議されています。商工会議所の「まちづくりビジョン検討委員会」が駅前再開発に取り組んでいますが、この委員会に参加するよう依頼されたので、新しい「まちづくり」に大学として積極的に貢献できればと思っています。新しいビルの一隅に入試広報のための場所を確保させていただければ、駅で乗り降りする高校生に、映像や資料をもって、地域にある大学を紹介できるのではないかと考えています。まちに若い学生たちがあふれるようになる、それを夢見ています。第四に、大学が主催する多彩なイベントや強化指定のスポーツにてこ入れを行い、敬和学園高校のみならず地元の高校生との交流



インカレフィールドアーチェリー2連覇の星さんと
(2012年11月6日)

をより重厚なものにしたい、そうした思いを胸に、改めて教職員や学生諸君とスクラムを組んで前進したいと思います。

●「前のものに全身を向けつつ」

与えられた場をひたすら駆け抜けることを思い、『フィリピの信徒への手紙』第三章一二節〜一四節を引いて、この稿を閉じたいと思います。「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっていないわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後のものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を指してひたすら走ることです。」

Profile

鈴木佳秀 学長 プロフィール

●最終学歴

クレアモント大学院 修了
(PhD in Religion)

●主な著書・翻訳

『ヘブライズム法思想の源流』（創文社）、『これからの教養教育―「カタ」の効用』（東信堂）、『神と国家の政治哲学』（NTT出版）、『旧約聖書を学ぶ人のために』（世界思想社）など多数。

社会を照らす希望の光

第一九回卒業式が三月二二日、聖籠町市民会館で行われました。会場には、思いの晴れ着を着た卒業生とご家族の方々が集まり、華やかな雰囲気になりました。

式典では、鈴木佳秀学長から卒業生一人ひとりに、力強い握手と共に「卒業証書・学位記」が手渡されました。今回の卒業生は、鈴木学長が就任して最初に迎えた学生たちです。式辞では、四年前の入学式を振り返り、ご自身と共に敬和での歩みを進めた卒業生たちに温かいメッセージが贈られました。地域に密着しつつ、国際的な視野を養うリベラル・アーツ教育を受け、実践してきた四年間の思い出が卒業生それぞれの胸に刻まれたことでしょう。

また、二年前の東日本大震災を忘れず、今年も学生、卒業生による「被災地への



卒業生1人ひとりとしっかり握手



敬和学園大学 第19回卒業式

大宮溥理事長による祝辞



卒業生から大学へ掛時計が贈られました



Keiwa HOPEによる募金活動



学生生活を共にした仲間と記念撮影

自分を見つける時間

英語文化コミュニケーション学科卒業

菅家 茜



入学当初は、「なんとなく…」という気持ちで大学生活を過ごしていたように思います。「私は何をしたいのだろう」という自分自身への問いかけに答えられないまま、他人がよいということや悪いということにはそのまま頷き、自分の意見を持ってない混沌とした日々が続きました。

しかし、教職課程で「教育」に出会っ

たころからその魅力に惹かれ、自分のしたいことが徐々に見えてくるようになりました。今思えば、教育に惹かれたことと同時に、授業や仲間と課題を解決することを通して自分を見つける時間を持てたことで、はっきりとした目標を持てるようになったのではないかと思います。講義だけでなく、ボランティアなども積極的に体験することで、いろいろな人の考えや感情に出会うことができ、物事の多様な見方を知ったり、自身をより深く見つめたりすることができました。

これからは、大学生活で築いた、人生をより楽しむための土台の上で、目標達成を目指しながらさらなる人間的な成長ができるよう、この卒業をゴールではなくスタートにし、人生を歩んでいきたいです。

第一九回卒業式のご報告



卒業準備委員の皆さん



チアリーダー部4年生によるダンス



学びを共にしたゼミの仲間



準備委員制作のメッセージビデオも好評



最後に卒業生全員で記念撮影

募金」活動が行われました。皆さまからの暖かいお気持ちとして、たくさん募金が集まりました。被災者の方々のために有効に活用させていただきます。

卒業式の後、新潟ブランドホテルに会場を移し、卒業記念パーティーが行われました。卒業準備委員が作成した、後輩学生、教職員からのメッセージ入りのビデオ上映や、卒業生自身によるチャダンなどが披露され、参加した卒業生や保護者の皆さま、教職員とで楽しかった学生生活を思い起こしながら、語らいの時を持つことができました。締めくくりには、参加した卒業生たちが大学生活を共にした恩師や仲間たちと舞台上に集まり、思い思いに記念撮影をしていました。

四年間の敬和学園での学びにより、それぞれの持つ可能性を広げて巣立っていく卒業生たちが、希望の光となり、社会を照らしてくれることを期待します。

挑戦し続けた四年間

卒業準備委員長

渡邊 真央



卒業準備委員会で卒業アルバムの写真を選んでみると、学生たちのいい顔ばかりで、改めて敬和学園大学で四年間を過ごせてよかったと感じました。敬和のよさであるリベラル・アーツ教育は人の温かみを感じさせてくれて、私はかけがえのない友と出会うことができました。

私にとってこの四年間は挑戦でした。

興味があることはとりあえずやってみ、自分がよしとするまでは諦めない」と心に決めていました。教職課程、部活、アルバイト、時にはなかなか上手くいかなくて辛い時期もありました。しかしすぐに相談できる仲間がいたおかげで乗り越えられました。

卒業記念パーティーでは委員が作成した卒業記念ムービー上映やチャアリーダー部四年生によるパフォーマンスで盛り上がりました。敬和で経験したことを生かして卒業生一同、辛いことに直面しても自分らしさを見失わず社会で活躍していきたいです。

最後に後輩たちへ。敬和で過ごす四年間は自分の生き方を考えるよい機会となります。仲間との出会いに感謝し、素敵な大学生活を送ってください。

本当のコミュニケーションとは



英語文化コミュニケーション学科卒業

後藤 はるか

私は、四年間の大学生活でたくさんの方に挑戦しました。教職課程、児童英語教育プログラム、課外活動では、パドミントン部、チャリーダー部に加入、Keiwa HOPEでの被災地ボランティア活動、国際交流インストラクターとして小・中学校でのワークショップにも行ってきました。たくさんの方に挑戦する中で、私は人との接し方を学ぶことができました。

私はコミュニケーションをとるのが得意だと思っています。しかし、今までは自分のことを一方的に伝えるだけで、相手のことは二の次でした。いろいろな年齢の方たちと接する中で、自分のことを伝えるだけでは、コミュニケーションにならないということに気が付きました。まずは相手の話を傾聴し、その話を受け入れた後に、自分の話したいことを伝えなければいけないのだとわかりました。

卒業後は地元の佐渡に帰り、大好きな佐渡のために働きます。敬和学園大学で培ったコミュニケーション能力を活かして、佐渡のために活躍できる人になりたいです。

縦・横につながる大学で学んだこと



国際化学科卒業

太田 文哉

大学生活四年間で、たくさんの方を経験し、そして人との関わりの中で、互いに助け合い、協力していくことを学ぶことができました。

高校生の時、歴史・政治分野に興味を持っていた私は、恩師の勧めもあって、敬和学園大学に入学することを決めました。入学後は歴史・政治分野を学ぶこともさることながら、教職課程や学内行事、アルバイトなど多くのことを経験しました。時には辛いこと、困難な場面に立ち向かわなくてはいけない時もありましたが、そのそれぞれの過程で関わった人との協力、そして助け合うことで乗り越えていくことができました。

敬和学園大学はとにかく縦、そして横のつながりが強い大学だと思います。先輩、後輩間の仲がよく、先生、職員の方々との距離も近い。こういった環境だからこそ、お互いに高め合い、そして助け合い、協力し合う関係が成り立つのだと思います。

ここで学んだ「人と助け合うこと」を、今後の人生においても活かしていきたいと思っています。

自分自身で見つけ、決めていく価値



共生社会学科卒業

長谷川 啓太

入学した当初、仲間ができるのか、「福祉を学ぶ」とはどういうことなのか、多くの不安があったことを覚えていますが、しかし、実際はそのような不安を忘れさせるほど、充実した学生生活でした。

講義では、個性的な先生のもと、地域福祉、児童福祉、高齢者福祉、障害者福祉、保健医療と、「福祉」という一言では言い表せない多くの科目を学びました。そして、「福祉」はさまざまな分野に分かれてはいても、全てに繋がりがあつたことを学び、実感しました。三年生の相談援助実習では、日常とは全く異なる現場での緊張感が講義とは違って新鮮でした。

学生生活ではアーチエリー部に所属し、先輩や後輩、他大学の学生との繋がりができました。アーチエリーという他の人がやったことのないスポーツということが、私にとっては逆に奮起する理由となり、貴重な経験になりました。

高校生の時は、偏差値などで大学の価値が決まると思っていましたが、この大学生活を通して価値は自分自身が見つけ、決めるものであると感じました。貴重な時間をありがとございました。

敬和生の日本人として生きる姿に感激



人文学部
パトリック・リー

三年が経ち敬和を離れる時がきました。皆さんにお別れを言うのは気が重いです。敬和で教えた経験は素晴らしいものでしたし、教えることや日本人、日本について多くを学びました。ある意味で、私自身も「敬和生」でした。そんな私が学んだ中では、「新潟学」が一番面白かったです。川端の『雪国』について多くを学び、雪が好きになりました。この辺りでは最も熱心な『雪掻きガイ』だったのではないかと自負しています。新潟はラーメンもすばらしく、行きつけの店にこの三年で一〇〇回は通いました。

それにしても大震災後の敬和生には本当に驚きました。日本の片隅にあるこの小さな大学で、東北や福島の人々の必要に応える無私の思いやりと寛容の精神を私は目撃しました。私はそんな学生たちを誇りに思いますし、日本人がますます愛すべき存在になりました。日本人の一員として皆さんは、大災害と悲劇の時にどのように振る舞うかを世界に知らしめたのです。生きることに私に教えてくれた皆さんに感謝したいです。

さよなら。皆さんの夢と人生の目標が達成できることを祈ります。皆さんがくれた敬和での思い出を大事にします。

四年間の集大成 卒業論文のご紹介

敬和学園大学では、一年生から四年生まで続く演習（ゼミ）の集大成として、教員からのマンツーマン指導で卒業論文に取り組みます。毎年行われる卒業論文発表会には、教員のみならず、一年生から四年生までの学生が参加し、研究の成果を共有しています。ここでは、昨年度提出された卒業論文のうちから二本をご紹介します。

『ダロウエイ夫人』における孤独と喪失



英語文化コミュニケーション学科卒業
西村 理美

私は登場人物たちの繋がりや孤独をテーマとして英語で卒業論文を書きました。ヴァージニア・ウルフの『ダロウエイ夫人』は、戦間期のロンドンに住む上流階級の女性クラリッサ・ダロウエイの一日を中心に描かれています。他人の考えや私生活をこっそりと傍受しているような、日記を読んでいるような、そんな気分になる小説です。物質的には恵まれていても精神的に孤独を抱えているクラリッサ、正反対の立場で自由を求める負傷兵セプティマス、精神を病んだ夫を看護する物理的にも精神的にも孤独なその妻。原書で読むと同じ「孤独」を表すにも単語の使い分けがされていることも発見できました。作中では全く関係がないと思える人々が、実は繋がっています。階級や環境、暮らしが違っても、各々感情を持って、同じように悩む姿に、人間が持つ普遍性を見たように思います。

『日本における化粧の変遷』



国際文化学科卒業
渡邊 舞

自身の外見とその人を取り巻く社会は日々深く関係しており、現代人の生活で化粧をすることの存在は大きなものとなっているといえます。社会的に化粧は必須と考えられている場合もあります。最近では、あえて化粧をしていない状態の顔「すっぴん」を公開する女優やモデルなどがメディアに登場するなど、化粧をしない状態も公のものとしてきていると思われれます。今の日本では、女性、男性関係なく日常生活で化粧をすることができ、そして婚礼や葬儀などの通過儀礼、神事、または舞台用と化粧は我々の生活に大きく関わっています。どのような人が、いつ、何のために化粧をするのか。また化粧に対する人々の意識はどのように変化し、人々の生活に息づいているのか、自分自身化粧をする身であり興味を抱いたため、このような研究テーマで卒業論文を書きました。

「本気で公務員」への道

新発田市職員に採用されました

経済状況への不安から「安定」を求めているのか、公務員採用試験の倍率は高くなっていきます。本学から採用された先輩たちは、一、二年生の早い段階から目標を定め、準備を重ねてきました。「安定」だけでは、長い準備を続けることは不可能」というある先輩の言葉は印象的です。地域貢献への強い気持ちで先輩方を支えてきました。就職委員会では、学生の受講料を補助し、公務員採用試験対策講座を毎年開講しています。公務員とは何か、試験の内容を概観できる講座です。また、学内では教員によるキャリア関連勉強会も開催されています。「なんとなく公務員」では受からないのが実情、大学のサポートをうまく利用し、「本気」で夢をかなえましょう。

(就職委員会)



受講料を補助し、公務員対策講座を開講

将来のための大切な「今」



英語文化コミュニケーション学科卒業

大淵 将司

新発田市に来て、四年が経ちました。街中では知らないおばあさんに話しかけられることもあり、とても心が温まります。私の大好きな新発田市で高齢者福祉に携わりたいと思い、公務員採用試験を目指してきました。

勉強が苦手な私にとって、受験の準備はつらく、長い道のでした。試験に合格できたのは、恵まれた環境のおかげです。公務員採用試験合格という同じ目標を持った仲間を集めて勉強会を開いてくださった富川先生や、私を含めた二二人の学生のために貴重な時間を割いて法律の講義をしてくださった藤本先生の存在は特に大きいものでした。

私は、将来の目標に向かってがんばっている後輩を何人か知っています。目標に向かって努力することを、大切な「今」を犠牲にすることだと言っ人がいたら、私は残念です。なぜなら、努力が報われた今、苦しかった日々を振り返ると、あの時、私にできた最高の時間の使い方だったと思えるからです。

私を応援し支えてくれたすべての人から感謝しています。私も将来、誰かを支えていけるよう、これからの仕事を通して成長していきたいと思います。

来春にむけた就職活動がスタート

学内合同企業説明会を開催

二月一日、本学体育館を会場にして二〇一四年春採用対象の学内合同企業説明会を開催しました。

新卒学生の就職は回復状況にあると報道されていますが、新潟県内では依然厳しい状況が続いています。そのような中、例年並みの七五社の企業等の採用担当者の皆さまにご参加いただくことができました。ご参加いただいた企業の皆さまからは、就職活動をはじめた三年生募集はもちろん、最後まで就職活動の継続を余儀なくされている四年生向けの追加募集についても情報提供していただきました。心より御礼申し上げます。

(就職委員会・キャリアサポート課)



企業の方のお話を真剣に聴く学生

実践的に学ぶ教職課程

卒業生が新潟県教諭に採用されました

敬和学園大学では、中学・高校の英語科および、高校の公民科、地理歴史科、中学校の社会科学の教職課程を設置しています。教職課程の授業は、一年生の後期からはじまり、四年間を通して学生は教員として必要な知識を身につけるだけでなく、教える技術を実践的に学び、専門教科の知識を深めます。教職課程を通して、さまざまな困難を乗り越えて成長し、教員に必要な主体性や協調性、運営力、責任感、リーダーシップなどを身につけます。このような実践的な学びにより、昨年に引き続き、今年も卒業生が新潟県の教諭に新規採用されました。

(教職課程委員会)



教える技術を実践的に学びます

ようやくスタートラインに立ちました



二〇〇六年卒業生

内山 貴啓

私は、大学を卒業してから六年間さまざまな中学校で働いてきました。そして、昨年の採用試験に合格し、四月から正式な教諭として働くことになりました。

これまで多くの人に出会い、多くの経験をし、学ばせてもらいました。うれしいことや叱られたこと、うまくいかずに悔しい時もありました。そういうことを全てひっくり返して、やってきてよかったです。この六年間の経験の何一つでも欠けていたら、私はまだ採用試験に合格することはできていなかったと思います。

私の場合は、採用試験で不合格を繰り返して、先が見えなくて不安な時もありました。それでも、私は挑戦し続けることができました。それだけの魅力と価値がこの職業にはあるからです。この職を選ぶということとは、決して楽な道ではありません。公務員であること、他者の人生に影響を与えること、挙げればざりざりありません。それでもあえて教職課程を履修している皆さんを卒業生として心強く思いますし、応援しています。私もスタートラインに立ったばかりですが、お互いがんばっていきましょうと思います。いつか同じ職場で、敬和の卒業生と働けることを楽しみにしています。

震災を忘れず

被災地ボランティアと被災者訪問



英語文化コミュニケーション学科三年

長谷川 千紘

震災以来学内で募金をしてきた私たちは、今回の被災地ボランティアの機会に岩手県の保育園、幼稚園に募金を届けに行きました。多くの園舎は園児の安全を考え高台に移転しており、探すのに苦労しました。

訪問先の保育園では、震災直後に生まれた園児たちとふれあい、以前に送った義捐金で購入したマットや鉄棒で遊んでいる様子も見せてもらいました。最後に訪問したおさなご幼稚園では英語の絵本の読み聞かせもしました。次も楽しんでもらえるように大学での募金や勉強を続けていきます。



運動前のカップバ体操

中村先生が高校生新聞に連載

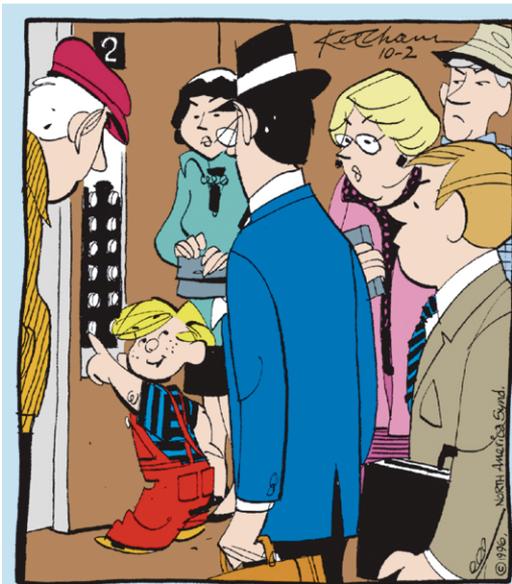
「デニス・ザ・メニス」で学ぶ英語

昨年度より「高校生新聞」誌面にて、本学英語文化コミュニケーション学科の中村義実先生による「デニス・ザ・メニス」のコラムが連載されています。高校生新聞（高校生新聞社）は、日本で唯一の高校生向け全国版月刊誌です。県内の多くの高等学校にも配布されています。

「デニス・ザ・メニス」は、五歳児デニスの型破りな言動が周囲を「メニス(脅威)」に巻き込んでいく、アメリカ日常生活の一コマを描いたものです。アメリカで六〇年以上の連載を誇る人気コミックです。

このコラムは、この一コマの場面で行われる英語表現やその文化背景を、中村先生がわかりやすく解説することで、楽しみながら英語のネイティブ感覚が身につくように工夫されています。高校生だけでなく、大学生や大人も楽しめます。下記に三月号のコラムを転載しましたのでご覧ください。

また、高校生新聞公式ホームページで昨年度の連載コラムがご覧になれます。「愛読大学生のデニス評」も掲載中です。新聞およびインターネットを活用した、中村先生の新しい形での英語教育の発信をご活用いただき、皆さまの英語力向上にお役立てください。(広報委員会)



"I PRESSED ALL OF THE BUTTONS SO WE'D GET A GOOD, LONG RIDE."

デニス・ザ・メニス
Dennis the Menace
BY HANK KETCHAM

5歳児デニスの型破りな発想と発話が周囲を「メニス(脅威)」に巻き込む。アメリカ日常生活の一コマを描く「デニス・ワールド」に浸りながら、英語のネイティブ感覚を身につけよう。

"I pressed ALL of the buttons so we'd get a good, long ride."

Point

press 押す
button(「ボタン」) ボタン
so we'd = so (that) we would

[MEMO] so (that) ... will ... は「…が…するように」を意味する。
'd (=would) はwillの過去形。

訳 「ぼく、ぜんぶのボタン押したよ。楽しくいっぱい乗れるようにね」

解説

エレベーターに乗ったデニスは、突如全ての階のボタンを押しました。デニスはババに向かって得意げにほほ笑んでいます。乗り物の「ワクワク感」を一緒に長く楽しめるようにと気を利かせたデニスだったのですが……。周りの大人たちは呆気(あっけ)にとられるやらムスとするやら。はた迷惑といえばそれまでですが、大人に子供心呼び覚ますデニスの面目躍如です。囁き(ひんしゆく)の中、ババはどんな表情を浮かべているのでしょうか？

(中村義実=敬和学園大学人文学部英語文化コミュニケーション学科教授)

※中村先生が、高校生新聞のサイト「スクッチャ・デニスに学ぶ魂の英語」に登場。英語を楽しく学ぶ方法を教えてくれるよ。

高校生新聞 (高校生新聞社) 2013年3月号掲載の記事

高校生新聞公式ホームページ「デニス・ザ・メニス」
<https://www.koukouseishinbun.jp/category/interesting/d-t-m>

文学で地域おこし

第五回「阿賀北口マン賞」授賞式

第五回「阿賀北口マン賞」授賞式とまちの駅よろず「新発田学研究センター」開所六周年記念シンポジウムを三月二日、新発田市生涯学習センターにて同時開催しました。シンポジウムは、「地域の宝を活かす」と題して、岩手県宮古市と滋賀県高島市での、エコツアーリズムを通じた地域の魅力や宝の掘り起こしの実例が紹介されました。また、阿賀北地域の宝を活かす活動として、加治川ネット21による絶滅危惧種イバラトミヨの保護活動や内の倉タムでのコンサート活動、武庸会による新発田出身の堀部安兵衛の顕彰活動が紹介されました。授賞式では、受賞者の皆さまより喜びの声が聞かれました。受賞者の皆さま、おめでとございました。(新発田学研究センター)



「阿賀北口マン賞」受賞者の皆さま

新発田市オープン・カレッジ

市民参加型の講座にリニューアル

いつも敬和学園大学のオープン・カレッジ(公開講座)にご参加くださりありがとうございます。

今年度のオープン・カレッジ新発田市会場では、市民参加型の講座を目指して企画しております。前期は新発田のお宝発見をテーマにし、四月は新発田学研究センターと連携した「写真アーカイブ」加治川の桜」と題した写真上映会、五月の十二斎市お茶会を前に和菓子作りの体験、六月は「学生たちが撮ったまちのお宝」と題し、学生が新発田を取材し制作した映像上映会を行います。

後期は世界を知ることテーマにし、九月は世界を旅しているアメリカ人講師による環境と文化のつながりに関するお話、一〇月はフランスに造詣の深い講師によるフランスの文化と芸術に関するお話、一一月はフランス人講師によるクッキング体験を行います。

新発田学研究センター(大栄町一)とまちカフェ・りんく(諏訪町一)を会場に、参加費はコーヒーなどのワンドリンク付きで五〇〇円です(五月と一一月は別途材料費が必要)。

市民の皆さまと、地域のこと世界のことを学びつつ、楽しい交流の場を持つことができそうです。願っています。

(広報委員会)

学事予告

◆四月◆

- 一日 学年始め
- 四日 入学式
- 後援会総会
- 五日 プレイスメントテスト
(健康診断(八日まで))
- 九日 新入生歓迎公開学術講演会
- 一〇日 履修相談日
- 一一日 前期講義開始
- 履修登録期間(一七日まで)
- 一五日 学費前期納入最終日(二〇〇四年)
- 一六日 新発田市オープン・カレッジ①
- 一八日 新入生オリエンテーション(一九日まで)

◆五月◆

- 一〇日 入学記念植樹式
- 一七日 新発田市オープン・カレッジ②
- 二五日 高校生向け英検対策集中講座①
- 二六日 新発田朝市十二斎市

◆六月◆

- 八日 大学オープン・カレッジ①
- 九日 大学オープン・カレッジ②
- 一五日 敬和学園高校対象オープンキャンパス
- 一六日 オープンキャンパス
- 一七日 創立記念日
- 一八日 新発田市オープン・カレッジ③
- 二二日 スポーツ大会
- 二六日 教員対象進学説明会
- 二九日 高校大学合同研修会



与えられたチャンス



二〇一〇年度卒業
金田 彩夏

授業、教職、バイト、海外へ、この繰り返しだった大学生活。国際ボランティアサークルでタイへ行き、普通の旅行とは違った経験ができたことが転機でした。知らない世界をもっと知りたい、むしろ知らなければいけないという衝動に駆られました。

現在、中南米コスタリカで日本語教師をしています。今婚約中の彼との生活を始めるため、在学中に移住を決め、現地で日本語教師になるため、ダブルスクーリングという道を選びました。教職を履修しながらで大変でしたが、あの時にその道を選んでよかったです。

来たばかりのころは、スペイン語の勉強、学生集めのため近所の掲示板にチラシを貼り、イベントがあれば売り込みに。そんな日々が続きました。言葉の壁や文化の違い、旅行者とは違う立場に、ここで生活していけるか不安でした。そんな時、ある言葉と出会いました。『Pura vida』直訳は「純粋な人生」。元気？、ありがとつ、さようなら。時には「もっとと人生楽しもう。」と訳されることも。これを受聞かたび、もっと肯定的にこの文化を受

け入れよう、でも同時に日本人としてのアイデンティティを忘れないようにと自分に言い聞かせています。今では語学学校やインターナショナルスクールでお仕事がいただけるようになりました。実はコスタリカ、日本のアニメや漫画、コスプレが驚くほど人気なんです。日本が世界の裏側でも愛されているってうれしいことだと思いませんか？彼らにアニメだけではない日本文化を伝える機会があることは私にとって価値あることです。

「チャンスが来た時に、すぐ掴めるよう自分にできる最大限の準備をしておく」、ある教授にいただいたアドバイスです。後輩の皆さんも与えられたチャンスを逃さないように「準備」して欲しいと思います。最後に、ここで仕事があったるまでに、家族や友人、敬和の先生方からの温かいサポートをいただきました。ありがとうございました。



インターナショナルスクール
日本語クラブの子どもたちと

寄付者ご芳名

(二〇一三年二月二十八日現在、敬称略)

〈一般〉

荒井 重人、遠藤 恒雄、本田 明子、
星名 忠直、和泉 正二、貝瀬万里子、
北島万紀子、小島 一則、近藤 由松、
小柳トミエ、松崎 武、松澤 郁子、
村越 大純、村山 国弥、中村 直藏、
西山 信子、奥田 泰道、大川 聡、
太田 二郎、寒河江一雄、笹川 寛、
志田 敏子、相馬 六、高橋 眞澄、
寺尾 一美、和田 進、山田 いく、
山際多美子、吉川 祥子、
東中通教会婦人会、株式会社大西、
国際ソロブチミスト新潟・はまなす、
経堂緑岡教会、新発田キリスト教会(2)、
東中通教会、見附教会(2)、新潟教会、
新潟教会婦人会、新潟信濃町教会、
新潟YWCA、
(社)高倉ひかり保育園理事長永倉信嗣、
在日本インターボード宣教師社団
〈卒業生・在学生・保護者〉
今井 正仁(一)、水野 元喜(一四)、
新田 和子(二)、渋川 伸一(五)
〈学園関係〉
北垣 宗治、小淵 康而、
鷹澤昭一・信子、後援会(3)

(一)内、漢数字は期生、算用数字は回数

・ 本学にお寄せくださいましたご支援・
ご厚意に心より感謝申し上げます。

1 January

- 7 講義再開
9 教授会
10 卒業論文提出締切日
11 AO 入学試験 (3期) 合格発表
チャペル・アッセンブリ・アワー ㉔
説教 金山愛子 教授「よき知らせ」
講話 川本健太郎 講師「生きること、働くということ」
18 チャペル・アッセンブリ・アワー ㉕
説教 大澤秀夫 宗教部長「世界に収めきれない」
Keiwa HOPE「震災ボランティア報告会」(写真1)
19 大学入試センター試験(～20日)
21 留学生交流・餅つき大会(120名、写真2)
22 教職課程報告会
23 Keiwa HOPE チャリティ・パーティー(写真3)
24 理事会・評議員会
25 チャペル・アッセンブリ・アワー ㉖
説教 鈴木佳秀 学長「練達は希望を生む」
後期エッセイ・コンテスト授賞式
ケリー・ニューエル奨学金授与式
学生団体年度内表彰式
後期資格取得奨励奨学金授与式
26 後期講義終了
相談援助実習およびフィールドトレーニング報告会
27 一般入学試験(A日程)、外国人留学生入学試験(1期)
第25回社会福祉士国家試験
28 後期末試験(～2月2日)
30 臨時教授会



2 February

- 1 一般入学試験(A日程)、外国人留学生入学試験(1期)
合格発表
3 春期休暇(～4月2日)
4 後期集中講義①(～8日)
6 教授会
8 大学入試センター試験利用入学試験(1期)合格発表
後期集中講義②(～14日)
12 後期末追試験(～15日)
14 一般入学試験(B日程)
15 学内合同企業説明会(75社)
16 文章講座①(新発田学研究センター、14名)
18 後期集中講義③(～22日)
19 Keiwa HOPE 被災地ボランティア
(岩手県大槌町・遠野市ほか、12名、～23日)
臨時教授会
20 一般入学試験(B日程)、AO入学試験(4期)合格発表
22 第2回入学前スクーリング「大学生活の目標とは」(写真4)
26 阿賀北ロマン賞受賞作品読み聞かせの会①
(富塚・のぞみの里)
27 再試験

3 March

- 1 図書館蔵書点検(～21日)
2 第5回「阿賀北ロマン賞」授賞式
まちの駅よろず「新発田学研究センター」
開所6周年記念シンポジウム
総合テーマ「絆が生みだす地域の力」
シンポジウム「地域の宝を生かす
-絆を紡ぐエコツーリズムの提案-」(写真5)
シンポジスト 海津ゆりえ 文教大学准教授
真板昭夫 京都嵯峨芸術大学教授
比田井和子 株式会社未来政策研究所
若月学 加治川ネット21理事
高橋正明 新発田堀部安兵衛武庫頭彰会
(新発田地域交流センター、60名)
3 文章講座②(新発田学研究センター、17名)
5 阿賀北ロマン賞受賞作品読み聞かせの会②
(富塚・のぞみの里)
6 教授会
8 大学入試センター試験利用入学試験(2期)合格発表
13 臨時教授会
一般入学試験(C日程)、外国人留学生入学試験(2期)
15 一般入学試験(C日程)、大学入試センター試験利用入学試験(3期)、
外国人留学生入学試験(2期)合格発表
第25回社会福祉士国家試験合格発表
18 阿賀北ロマン賞受賞作品読み聞かせの会③
(希望の園、写真6)
22 第19回卒業式(聖籠町町民会館)
卒業記念パーティー(新潟グランドホテル)
AO入学試験(5期)合格発表
29 理事会・評議員会
31 学年終わりに



Gems in KEIWA

チャレンジ学生ファイル Vol.41

自分を変えた研究発表会

国際文化学科卒業
竹内 元希



卒業式後に恩師の神田先生と

私は中学、高校と部活や遊びに時間を費やし、机に向かって勉強したことはほとんどありませんでした。私の所属している神田ゼミは2～4年生合同で、新発田の研究やまちおこしなどの活動をしています。最初のころはだらしない態度で授業にのぞみ、厳しいこのゼミを選んだことを後悔していました。

そんな中、2年生の終わりにあった地域の方向けの研究発表に他のメンバーが急な都合で参加できなくなり、発表資料も何もかも、1人でしかも一晩で用意しなくてはならない事態になりました。先生からのアドバイスもハードルが高く、死ぬ思いで準備し、なんとか当日の発表を乗り切ることができました。この時に、今まで見えなかった自分の力に気づくことができ、苦手なことにチャレンジする重要さを理解しました。今では難しい本を読むことも苦痛ではありませんし、卒業論文も完成させました。

苦手なことを経験すればするほど、鏡のように本当の自分が映し出されます。私を成長させてくれた人たちに感謝し、これからもチャレンジしていきます。

神田より子先生からのコメント



竹内くんはよく遊びよく運動する元気なタイプの学生でした。でもあるとき本人も書いているように、目が覚めたんですね。手取り足取り、そして頭取りの状態での指導でしたが、要求された、図書館での本の探し方から、本の読み方、文章の書き方、そして参考文献の使い方まで、やってきました。結果としてきちんとした卒業論文を仕上げるまでにいたり、何よりもゼミの中での発表者へのコメントも的確になりました。とてもよく成長してくれたと、教師として感謝したい気持ちでいっぱいです。



敬和学園大学の最新情報

敬和学園大学

検索

www.keiwa-c.ac.jp

